



## 新春随想

★カット写真は郷土民芸品

## 銅像

竹下三新

正月が来るといつも生徒とともに歩いた三数十年が束の間にも過ぎた様な気がする。うち最近十数年間は直接生徒に接触しないで、学校をあつつかっているがその苦勞も多けれど又楽しいものである。というのも歴代校長が敷いておいた伝統という二本のレールの上を一人でも脱線せぬように走らすだけの責任がある。

さて當に開校当時の初代校長の苦勞は並々でなかつたらうと考えさせられる。例えば福沢先生の慶応精神や、クラーク師の北大路線が次々に承つてつがれて、かく固たる輝しい熱風が、校風が出来上っているのと同じで、こうした恩恵を受けている現在の者として日夜その功績をたたえ、生徒にその精神を吹き込みたいと念願している。

私は幸にも八代農業高校で第一代校長の銅像を造らうという同窓の人の盛上りの時期に際して、一ヶ年で建立の運びまで漕ぎつけた。その除幕の式典に出席された御本人の口から八代農業の開校当初の苦しみもこれで楽い思い出になった」と聞いて御世話した甲斐があったとしみじみ感じた。やっぱり建てるなら御本人の生存中に限ると痛切に思った。

その後本校に転任してみたら又初代校長胸像建設が計画されていた。私は聊か八代農業高校で経験していたので自信があった。

## 冬の魚

堀川喜八郎

鹿北の山脈で育った私は、魚のこととなると全くの手おあげです。アジとかサバといったごく一般的な魚くらいは知っていますが、ちよつとこみいった魚となると、一体どんなかところをしていいのか、さっぱり見当もつきません。いつだったか酒の席で、ハモには身はないのかと聞いて、板前さんに大笑いされたことがありました。

シンビタ、という一風変わった名の魚についても、そんな淡水魚がいるというとはせずいぶん前から知っていました。実物を見たことはありませんでした。その名をおぼえていたが、実際に荒尾から「しびた」という詩の雑誌が出ていたので、知ったくらいで、誌名になるなどだからよほど特異な魚にちがいない、たとえはくむつころうみみたいな、と勝手にその形態を想像していたのです。

ところが昨年夏から思いがけなく、わが家でそのシンビタなる魚を飼うことになりました。職場に漁の好きな同僚がいて、生捕りにして二尾あまりも持ってきてくれたのです。再三、釣りに誘われていたので、少年のころ遊び半分に、アブラメやハエを釣って楽しんでいただけの経験のない私は、なんとなく気が進まず、返事をしぶっていたので、新手の戦法を案出したのでしようか。

はじめで見るとシンビタは、ふつうの川魚とおなじく黒味がかった色で、一寸足らずの、メダカの親分といった大きさでした。じつさいはもっと大きくなるのでしたが、私のものだったのはまあ、そんなものでした。形は平べったく上から見れば、一寸しの線にすぎませんが、横からはレンゲン透視のように、内臓や骨組みまで透けて見え、20尾あまりが群れをなして泳ぐさまは、実

余程銅像に縁があるの心ひそかに喜んだ。

ここでも一ヶ年で完成して除幕の式典をあげたが、今度こそ故人だったので遺族入達の満足げな笑顔を見て肩の荷を下ろした。でも両方共その校長の在職当時の卒業の卒業の人達は了解が早いけど、時が變ると中々実感が出ぬらしいと考えさせられた。

銅像とは少し趣が變るけど本館の前に御影石の碑を生徒たちが昨年二月二十七日に建てた。「今頃の高校生は」という言葉をちよちよ聞いてくけど、年をとるとその生徒がとても可愛いようになってくる。

実は三十七年の二期の初まった九月頃、特殊の血液型の人が献血として尊い生命をとりとめたという。ニュースを見た生徒たちが期せずして献血をしようとした。早速全校生徒が献血して各方面から感謝された。その後皇太子並びに美智子妃両陛下より御褒賞の御言葉を受けて、それを記念して、愛と献骨の碑を立てた。恐ろしい記念碑がある限りこの善意はつづくものと考えられる。こうした卒業生を中心とした銅像なり、在校生が計画した碑が、有形無形に学校の進展に非常な役立っていることを思い、更に努力してよりよい生徒の指導に力を傾注したいものと新年を迎えてあらたなものを感している。(県立阿蘇農業高校)

に見事です。

わが家では玄關の下駄箱の上にながら調度品よろしく、そのシンビタの四角いガラス鉢を置いていますが、訪問者はききながら「熱帯魚ですか」とたずねます。相見によつて「グッピーのまっただそうで……」とからかつたり、「なにに、シンビタです」とこともなげに答えたりしましたが、たいていの人が魚名がわかること「ああ、これがそうですか」と珍らしそうにのぞきこみます。名前は知られていても、シンビタの実物にふれたことのある人は案外少いようです。

はじめは水になれなかつたのか、鉢が小さすぎたのか、毎日のように一尾、また一尾と白い腹を見せて浮かびあがり、この分では全滅するのではないかと、気が気ではありませんでした。しかし、それもある時期がすぎると、シンビタも種類が多く、私が生き残ったので。同僚の言では、シンビタも種類が多く、私にももらったにも四種類が混じっていたというのです。確かに、あるいは生存力のつよい種類だけが生き残ったのかもしれない。それにしても野の川にすむ魚を捕えてきて、小さなガラス鉢で飼うのは、いささか残酷なようで、時として気がひけることがあります。だが、世の中には殺生をして楽しむ人も多いことだから、とそなたに自分の心に言い聞かせ、相変わらずシンビタの遊泳を眺めて楽しんでみます。泥くさい色で、四才の女兒に不満らしく、シンビタのお洋服をきたおサカナを買つてよ」とせがみ、私を困らせます。しかし、金魚とちがいで動作がよばしこのので、いつまでも見あきず、結構、時間のたつのを忘れてしまいます。じつと眺めていると、山深い鹿北の養谷にひそんでいる、冬の魚たちのすがすがが目にかんてくるようです。(詩人)

## 四生日の誕生

川本洲子

暮れからお正月にかけてはともだが、とくにわが家では誕生日がいくつも重なりついそわそわと日々を過ぎてしまう。まづ十二月八日の長男のを皮きりに二十日は夫、一月十五日は長女、それに二十九日は家庭の誕生日ともいえる結婚記念日まで